

受けるといふことになつて來れば、演劇は自己の存在理由を新たな方向に發見しなければならなくなつた。藝術としての演劇を標榜することも、藝術それ自體の生存價值が再吟味を受けなければならぬ切迫した情勢を考へると生溫かいといふ外なく、一にそれが持つ國家的意義、並に國民大衆に及ぼす機能の面からの検討を必要とするに至つたかゝる見地に立つ時に、何人の眼にも色濃く浮び上るのは移動演劇の姿であり、次官會議の決定にも「演劇の普遍化」が叫ばれてゐる。

しかしながら演劇の普遍化といふことと移動演劇といふことは必ずしも同意語でなく、移動劇團の數を如何に増加するとしても市制を布いてゐる二百に餘る地方都市だけでも巡回するのが精一杯であらう。況んや無數の農村や工場の需要を満たし得ないのは論をまたない。

筆者の提唱したいのは、むしろ各府縣、或はそのブロックを單位とする常置劇團の設立である。この常置劇團は、それ／＼の地方文化と緊密に提携すると共に、一方中央から派遣される優秀な技術者の指導を受け、時にはそれと共演する。この劇團の根城とする一つの劇場を中心として、そこからそれ／＼の地方における工場、農村を訪れるとすれば、徒らな交通禍、輸送禍から免れ得るのみならず、こゝに健全著實な「演劇の普遍化」が達成されるであらうと思ふ(第二高校教授)

瓊玉の光輝

彌生壽月

第三回帝國藝術院賞授與者は昭和十九年三月四日の總會に於て日本因協會々長にして文樂座櫓下二代目豊竹古靱大夫と決定せる旨文部大臣より發表されたり。蓋し我淨瑠璃界空前の恩賞最慶事！受賞規則第一條に該當せるものにして其の卓越せる藝能は現代最高絶無の尊嚴と云ふべし、所謂「一道萬藝に通ず」忍苦精進の結晶、万藝中至難の淨瑠璃が藝道最高峰に放つ光彩は日本肇國精神、皇民魂の輝きなること大東亞新秩序建設戰下に認識せられたるものにして無限の慶祝を表す。我が金杉古靱師は斯道の爲君國の爲、若い人達を率ゐる研究鍛鍊多くの後繼を送り彌々益々この恩賞を輝かしめざるべからず、是れ則ち元祖に應ふる道にして同時に君國に捧ぐる最大の御奉公なり。これが爲には本誌は如何なる犠牲も甘じてこれに殉ぜん事を誓ふ。

瓊玉は隠るゝとも其の光輝は蔽ふへからず、古靱藝術は斯の如く徹底せり、恐らく本誌の此の主張に反對して不買同盟を起こしたる日本淨瑠璃界に潜伏せる米英崇拜の敵性危険思想家は夙に慚死せしならん。

▲朝に道を聞けば夕に死すとも可なり▼(孔子)